



Twitter



YouTube

明石のコミュニティ・スクール

未来にむけて 学びをかえる

未来を創り 社会を支える 新たな学びと育ちのシステムづくり

KomiKomiSukuSuku

明石市教育委員会事務局学校教育課 mail: gakkyo@city.akashi.lg.jp

For The Future

No. 184

2022

11.11

二見地区合同文化祭「中高生×地域サミット2022」が開催されました



11月3日、文化の日に二見町合同文化祭“二見みんなのまつり”が西部文化会館で開催されました。その中で、「中高生と住民が住みよい二見について語り合うサミット2022」と題して、二見中学校の生徒、明石西高校の生徒、そして二見町の地域の皆さんとで、これからの二見のまちを考える、対話の場がもたれました。二見町も高齢化がすすむ中で、オープニングでの挨拶で会長さんが言われた、“将来二見に戻ってきてくれるような環境づくり”は持続可能なまちづくりを進める上で欠かせないことであり、住民一人一人の

当事者意識が重要になってきます。世代を超えた、大人目線、子ども目線で対話ができるこのような場が必要であり、今回のような対話の場の持つ意味は大きくなってきます。

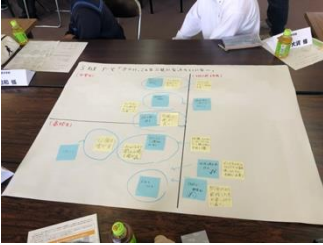
明石市内では、そうした住民誰でもが参加できる対話の場を定期的にまたは不定期ですが開催している地域も出てきています。今後、地域住民と中学生、高校生、そして、小学生も交えての対話が広がっていくといいなと感じました。

オープニングで、二見中学校、明石西高校の生徒さんから、活動中の地域貢献の取組の紹介がありました。二見中学校からは「柔道を通じて、地域へ恩返し！」を合言葉に柔道部がおこなっている農業体験や漁業体験を通じての社会貢献や、合唱部・ブラスバンド部の地域の世代間交流会への参加などが紹介されました。明石西高校からは生徒会の地域防災への取組やボランティア部の放課後や休日の地域での学習教室への支援が、そして教育類型の小学校の外国語活動への参加などの紹介がありました。こんな活動が始まっているんだとびっくりするとともに、中学生や高校生の地域の中での活躍が始まっているんだと感じました。二見中学校のクラブ活動としての地域貢献や高校生の地域の中での活動など、興味がわくだけでなく、可能性を感じました。また、対話の中で、地域の方が、中学生や高校生に「おじさんたちの頃には考えられないような活動をしているね、これからはそうした活動をした経験が大切になってくる」といったことを柔道部の生徒に声をかけられていました。地域の方が、そうした活動を



活動を知り、子どもたちにこうした声をかけていただけただけでも、この対話の場を開いた価値があるのではと思いました。

対話のテーマは「さらに、こんな二見になったらいいな」で、6つのテーブルで中学生・高



校生、そして地域の皆さんが自分の考えを書いたカードを模造紙に貼りながら考えの交流をおこなっていきました。その中で、地域の方の語ることを中学生、高校生が、そして、中学生や高校生が語ることを地域の方が、しっかり受け止めながら対話が進んでいくのを見ながら、話し合いの結果云々ではなく、こうした時間を持つ場が生まれたことに価値があり、こうした時間

を共有することで、当事者意識が芽生えていくんだろうなと感じました。対話の後、テーブルごとの発表では、こうした交流の大切さや、こうした対話が学校の授業の中で行われるようになったらいいなといった意見や、地域の方もどんどん学校に入って、みんなが先生といった交流もいいのではといった意見が出されたりしました。その中で、高校生が中心になって SNS で地域の情報やつながりを発信していけば、そのために二見でアカウントを共有したらといった今の若者らしい意見などが出されました。今日の対話が話で終わらずに、何か具体的なアクションとしてつながっていくために、対話続ける仕組みが必要なんだろうなと思いました。



そして会が終わって会場で配られたチラシを見て、またびっくり！高校生が SNS で発信といった意見が出ていましたが、チラシは二見の地域情報に特化した「明石ふるさと情報局」（テレビやニュースでは見れない地域情報 YouTube チャンネル）の案内チラシでした。近々このサミットの様子もアップされるそうです。地域の中でこうした地域情報を紹介し、地域の関心を高めていこうというこうした動きもこれから広がっていくのではと思ったりしました。



「町の幸福論 コミュニティデザインを考える 山崎 亮」(東京書籍)の活用

「町の幸福論 コミュニティデザインを考える」は6年の国語の教科書の教材です。

この教材は、資料を活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫する力を育むことを目指しています。ゴールとして地域の人に対して町の未来についてプレゼンテーションをする場が設定される事が多いのではと思います。地域のことを考えるきっかけや地域の皆さんと自分たちの地域について対話をするきっかけとして「町の幸福論 コミュニティデザインを考える」を積極的活用した取組がおこなわれるようになってきています。例えば、魚住小学校では、まちづくり協議会さんが出前授業として「町の幸福論」をまちづくり協議会さんのスタッフが授業をされたり、出された意見を地域の誰もが対話に参加できる“くすのん広場”で取り上げるなど、子どもたちのプランを実現できないかと考えられたりされています。また、松が丘小学校では6年生の子どもたちがおこなう地域貢献“松が丘プロジェクト”を実施するにあたり、地域の方と対話を重ねる松が丘サミットを実施するにあたり、その準備としてこの教材を活用されたりしています。

「町の幸福論 コミュニティデザインを考える」を「町の幸福論」という教材の勉強で終わらせるのではなく、地域や社会とつながり、関わっていくきっかけとなる教材として活用が広がっていけばいいなと考えています。そうした「町の幸福論 コミュニティデザインを考える」を経験した子どもたちが中学生・高校生になっても、今回の二見でのサミットのような世代を超えた対話の場があればいいなと感じました。選挙権がすぐそこにきている高校生にとって、よりリアルに社会を感じられる場としてより価値を持つのではと感じました。

(文責：北本)